

「学んでみよう高齢者の視機能について」 という研修会の内容とその効果について

○吉野由美子（視覚障害リハビリテーション協会）

澤崎弘美（いけがみ眼科整形外科 眼科専門医）

長谷川昌之（よつばケアプラン管理者 主任ケアマネジャー）

吉田久子（SOMPOケア錦糸町居宅介護支援 主任ケアマネジャー）

目 的

1 2022年に、町田市の医療と介護連携支援センターが、介護従事者を対象として「学んで見よう高齢者の視機能について」をテーマとして行った研修会について、受講者の反応を中心に明らかにし、研修会のもたらした効果と今後の課題について報告する。

および

2 同時期に「すみだケアマネジャー連絡会」がケアマネジャーを対象として行った医療研修会「高齢者の視機能等」で実施した受講者アンケート結果を参照し、介護関係者への「視覚障害者理解」についての研修会実施の効果や今後の課題を報告する。

尚、紙面の関係から、研修会で行われた講義の内容等を報告出来ないものでそれらに関しては、ドラフトや、下記ブログ等を参照してほしい。

吉野由美子の考えていることとしていること

<https://yoshino-yumiko.net/2022/12/post-36.html>



町田市医療と介護連携支援センターが 当該研修会を企画した背景・意図

介護保険分野に従事する者が利用者への支援を行う際に有益な眼科医療上の基礎知識を学べる機会には特に少ない現状がある。

本研修【学んでみよう！高齢者の「目の見えにくさ」について】を通じ、参加者が利用者へ適切な支援を行えるよう眼科医療と連携協働するための基礎知識を習得し、自身の専門職としての技術向上を図るとともに、有事の際には利用者を適切な医療へつなげるようになることを目的として全3回を開催した。

町田市医療と介護連携支援センター 令和4年度 多職種連携協働強化セミナー研修会の 内容及び参加者の属性

第1回 2022年8月18日

「高齢者の目の病気と見えにくさがもたらすもの」

参加者53人中(ケアマネジャー48人 デイサービス職員3人
特別養護老人ホーム1人 学生1人)

第2回 2022年10月27日

「高齢者の見えにくさを見過ごさないために介護現場で出来ること」

参加者41人中(ケアマネジャー40人 デイサービス職員1人)

第3回 2022年12月15日

「高齢視覚障害者のリハビリの可能性と視覚リハ専門家(歩行訓練士)の出来ること」

参加者38人中(ケアマネジャー38人)

事後アンケート結果 1

事後アンケートは、次の①②について自由筆記形式で回答を得た。

①講義を聞いて新たに得られたもの

(数字は類似の回答数)

第1回の後

介護予防のために目の健康を保つことと眼科連携の重要性 28

見えにくさの体験、見えにくさの多様性 12

目の病気の理解 11

見えにくさへの配慮や環境調整の具体的なこと、視覚リハ 5

第2回の後

視覚障害者に対する資源があること(歩行訓練士、訓練施設や相談窓口、視覚リハ、その他の社会資源など) 27

視覚障害者に対する具体的な制度(併給について、同行援護、その他の制度) 5

視覚障害者に対する具体的な補助具(タイポスコープ、福祉機器、その他の補助具) 7

利用者の見えづらさに着目することの意義 4

手帳取得の意義

事後アンケート結果 2

②講義内容に関して質問確認したいこと

第1回の後

介護現場での視機能の評価やアセスメント方法 2

視覚障がいのある利用者や家族への対応
(サービスや治療の拒否などに対して) 4

具体的な眼科医療について(検査方法、治療、
点眼薬や点眼方法) 4

往診について 2

中途の全盲の方がはじめて食べるものをおい
しいと感じるかどうか

自署の方法

第2回の後

視覚リハの頻度、実際のケースなど 2

視覚障がいのある利用者への対応(サービスの
拒否やリハへの意欲低下に対して) 2

リハ箋(訓練の指示書)が必要か 2

視覚障害手帳の基準、認定医がいるのかどうか
ドライアイについて

利用者の「冷凍パスタの味が見えないからわか
らない」の言葉へのアプローチに悩む

アンケート結果から研修会のもたらした効果と課題を考える

質問1、への回答は、裏を返せば今まで介護職が知りえなかったことや意識に上らなかったこと、と言える。本研修会によって、全体的に介護職の中で不足している眼科医療の知識や、視覚障害についての理解が促進されたと思われる。

具体的な障害福祉制度や併給のこと、具体的な福祉機器や補助具や便利グッズ、具体的な配慮や環境調整などの知識は、該当する利用者がいればすぐにでも現場で活かすことができるはずだが、聴講者に実際の行動変容をもたらすことができるかが次の課題であろう。

質問2、への回答は、介護職にとっていかに眼科医療や視覚リハが馴染みのない分野であるかを表していた。

介護現場での視機能の評価法やアセスメント方法についての質問が複数あった。介護現場での視機能評価は難しく視覚障害は見落としやすいことを伝えることで、早期の眼科受診と連携の必要性がよく理解されたと思われる。

視覚リハにつなげるために医師による指示書(リハ箋)が必要か？という質問は、眼科医療から視覚リハに繋げる仕組みが無いという特殊性を示している。介護から医療を介さずに、直接視覚リハ(訓練)施設や専門家につなぐことができると伝える必要がある。

すみだケアマネジャー医療研修会

医療研修内容

実施 2022年10月6日 18時30分から20時30分

「高齢者の目の病気の基礎知識」

澤崎弘美 眼科専門医(いけがみ眼科整形外科)

「視覚障害者(見えない・見えにくい)高齢者支援のために知っておきたい基礎知識」

吉野由美子(視覚障害リハビリテーション協会)

参加者への事前アンケートについて

ケアマネジャーが視覚障害についてどのぐらいの経験を持ち、知識を持っているかを把握したくて、事前アンケートを依頼した。

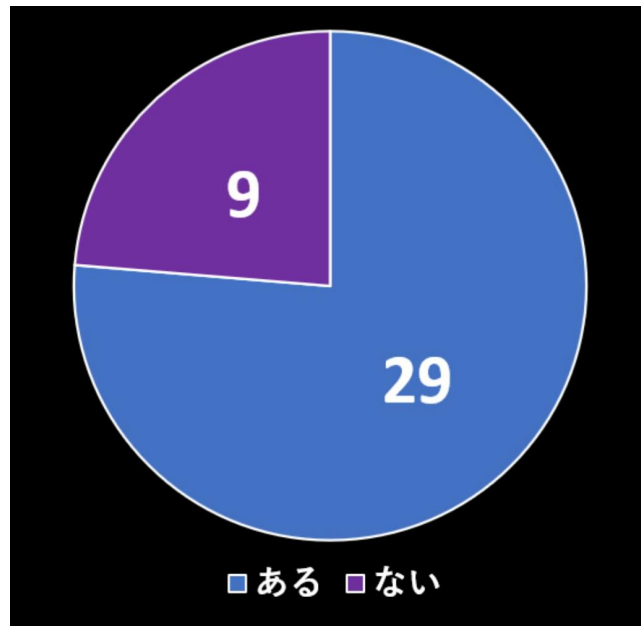
アンケートの様式は、チェック形式の簡単なもの

「過去・現在を通して視覚障害のあるケースを担当したことがあるか」

「障害者福祉サービスについての知識があるかそのサービスを紹介したり、勧めたことがあるか」など

1, 墨田区での研修事前アンケートの結果 (38名回答)

過去・現在を通して、
視覚障がいのある
ケースを担当したこ
とがありますか？

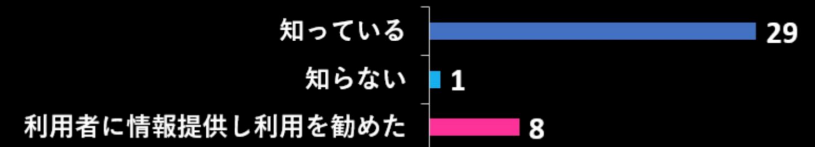


同行援護サービスや補装具としての白杖はほとんどの者が知っていたが、実際に利用者に情報提供や利用を勧めた者は非常に少ない。

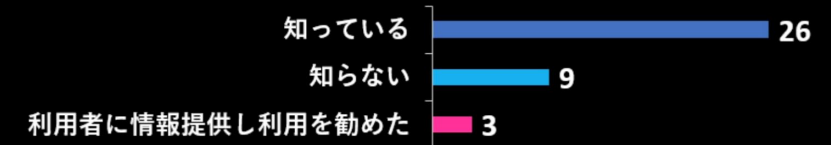
音声時計については約半数、歩行訓練や日常生活訓練といった視覚リハサービスの存在については8割近くの者が、知らないと答えている。

①～④は、視覚障害者が受けられるサービスについての設問です。
あてはまるものに○をつけてください。

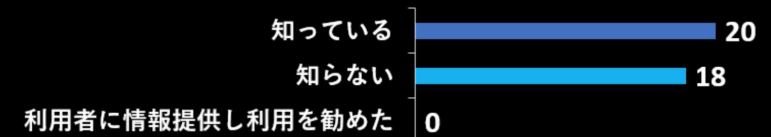
①同行援護で外出の支援が受けられる。



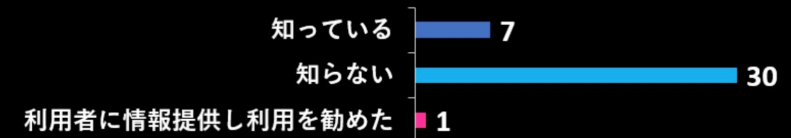
②補装具費の支給で白杖の支給を受けられる。



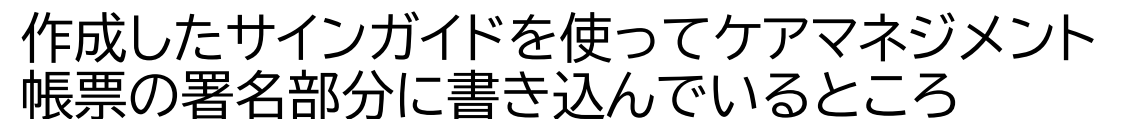
③日常生活用具で、重度視覚障害者には、音声読み上げ機能付きの時計の給付を受けられる。



④視覚障害者を対象にした歩行訓練や日常生活訓練などリハサービスがある。



① 自身が担当する利用者45名のうち3名に見え難さがあり、自社のケアマネジメント帳票の署名部分にガイドセットを作成して活用した。



②相談できる場所や人に繋げることができる

息子夫婦と同居するために住み慣れた家から転居をした視覚障害者。

新しい家で暮らしやすくするために視覚障害者福祉センターに相談し、サービス担当者会議に担当
者が出席し環境整備のアドバイスを受けることができた。

③音訳講習会へ参加

視覚障害について学び、自分にできることがないか考えるきっかけになった。

3, 研修を受けても難しかったこと

眼科医との連携は特に難しく、今後も課題。

ケアプランを作成するためのアセスメントにおいて、ロービジョンが及ぼす生活のしづらさを十分に把握できていない。

認定調査に用いる視力確認票や字が見える、見えにくいという項目だけでしか捉えておらず、利用
者の生活にどのように影響しているのか想像ができていないため見過ごしてしまい、活用できる
社会資源や制度について具体的な提案ができていない。

まとめー今後に向けて

- 1 介護関係者が「目の病気についての知識」や「見えにくさが日常生活に及ぼす影響」について学べる機会は、ほとんどない。
- 2 「高齢視覚障害者の見え方とケアについて」のわずか1～3回の研修を行うことによって、見えない・見えにくい方達への理解が深まり、サービスの質の向上が見られた。
- 3 介護関係者への「眼科疾患や視覚障害理解のための研修」の機会を増やす事が介護と眼科医療、介護と視覚障害福祉の連携を促進し、サービス向上の鍵となる。
- 4 介護関係職員の養成課程において、眼科疾患や視覚障害に関する基礎知識を教育するカリキュラムを増やすよう働きかける事が急務である。